

第10回 植村直己冒険賞授賞式

世界を歩くリヤカーマン永瀬忠志さんに贈呈



▲「サハラ砂漠ではタイヤの下に板を引いて進んだ。1時間引っ張ってもリヤカーは300メートルしか進まなかった」と話す永瀬さん

6月3日、日高文化体育館で第10回植村直己冒険賞授賞式を開催し、リヤカーを引き世界各地を歩き地球1周分の距離約4万キロを踏破した永瀬忠志さん（50歳・大阪市）にメダルや副賞を贈呈しました。「憧れの賞をいただき、植村さんのふるさとに来ることができうれしく思います」と永瀬さんが喜びの声を述べると、10回目を迎えたことで駆けつけた歴代受賞者を含む約600人の観衆から賞賛の拍手が送られました。また、授賞式終了後には、記念講演を行い、永瀬さんにスライドを使いながら壮大な冒険の足跡を語っていただきました。

記念講演会(要旨)

「リヤカーマン

世界を歩く」

くじけず、ゆっくり、一歩ずつ

旅は遅いほうがいい

初めてリヤカーと一緒に旅（日本一周）をしたとき、花売りに間違われたり、不審者として警察に通報されたこともありました。

しかし、ゆっくりリヤカーを引いて旅をしていると、いろいろな人に声をかけられ、その時、「旅は遅ければ遅いほどいいな」と思いました。ゆっくり歩いていけばそれだけ人や自然との出会いが増えるのです。

旅の終わりは

うれしさと寂しさが半々

初めて世界を歩いたオーストラリア縦断では、気温が50度を超えることもあり、予想をはるかに上回る暑さに苦労しました。「もうこんな歩き旅は二度としない」「この旅が終わったら、楽しい人生を送りたい」と強く思いました。

●熱気球に挑戦●



カメラポ

植村直己冒険賞10周年記念事業

「チャレンジと心の交流2006

・国府ふるさとまつり」

がんばった子どもたち



しょうた
中山昇太くん
(豊岡小5年)

気球が上昇すると人や車がとても小さく見えました。風に揺られて少し気持ち悪かったけど、また、乗ってみたいです。

●川下りに挑戦●





▲授賞式には歴代受賞者が顔を揃え永瀬さんの受賞に花を添えた。翌日は記念イベントに全員参加し市民と交流を深めた

新たな自分に出会う

しかし、あともう少しでゴールというとき気持ちが変わってきました。「もう歩かなくていいと思うとうれしいけど、本当に終わってしまおうと寂しい」と思うようになりました。うれしさと寂しさが半々で複雑な気持ちでした。結局、この時アフリカに挑戦する決意をしました。

アフリカのサハラ砂漠では、ものすごい強風に出会いました。それを我慢しながら歩いたのですが、どうしても我慢ができないときがありました。そんなときは、物を地

何か起きるから楽しい

面に叩きつけ、怖い顔をして風に向かって歩いて行き「お前、いい加減にしろ」と風に怒鳴り散らしました。すると、2、3分すると自然に心が静まり、また、歩き続けることができました。2、3時間泣き続けながら歩いたこともありました。

「俺ってあんなとき、あんなことを考えるんだ。あんなことをするんだ」と自分でも知らなかった自分に出会っていたことに、後で気付きました。それもおもしろさの一つでした。

昨年、30年ぶりに日本を縦断しました。前回19歳のときは、個人商店で物を買いながら歩きました。30年ぶりに同じ道を歩くと、個人商店が激減し、コンビニが至る所にできていました。

30年前、個人商店でパンや牛乳を買って食べようとすると、店の人がイスを持ってきてくれたり、味噌汁をご

できることを積み重ねる

これまで旅の途中で、歩くのが嫌になってしまったことはいくつもありました。

そんなとき、私はいつも「あと10日間だけ歩こう」と気持ちを切り替えています。

少しでもできないと思ってしまうと、すべてが終わってしまいます。しかし、自分でできることを少しずつ積み重ねていくと、できないと思ったこともいつかできるときがやって来ます。

これからは私は、植村さんの足跡に少しでも近づけるように、歩くことを続けていきたいと思えます。

●マウンテンバイクに挑戦●



●リヤカーに挑戦●



れいや
藤本礼也くん
(日高小5年)

起伏のある坂道が自転車に登れるか心配だったけど、やってみるとうまくいきました。



●クライミングウォールに挑戦●



みさ
嶋田美彩さん
(府中小6年)

登りはスムーズにできたけど、足の裏を付けて壁を下りるのがとても難しかったです。